

	<p>2009年5月15日 第72号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会  <a href="http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/">http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/</a>  E-mail : <a href="mailto:mizumidori@nifty.com">mizumidori@nifty.com</a>  〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&amp;fax3969-7124</p>
---	---

## ヒョンノキと虫こぶ

ヒョンノキとはマンサク科のイスノキ（柞、蚊母樹）の別名で、他にもユスノキ、ユシノキ、イス、ユスなどとも言われる木である。日本の中部地方以西と台湾から朝鮮半島にかけての山地に自生し、高さ15m位までに育つ常緑の高木（葉は互生）で、葉に少し光沢がある（若葉はモッコクなどに似る）ので、庭木としても使われるようだ。材は机や柱などに使われるそうだ。4月初旬葉腋に真紅の花を房状に付けるが、小さいので余り目立たない。

板橋区内には自生の木はないと思われるが、大門地区のニリンソウ群生地近くの人造林に、1～3本ずつ8箇所に分け17本植えられている。大きな樹木の陰になっているせいか、あまり樹勢が旺盛（高木になる）とはいえずにない。全ての木に夥しい虫こぶが付いているのも、元気がない原因の一つのようだ。こんな虫こぶだらけの醜い木では、たとえ広い庭があっても、植える気にはとてもなれそうにない。

イスノキの虫こぶ（虫えい、gall）はアブラムシ（イスノキコムネアブラムシやイスオオムネアブラムシなど）によるもので、若葉が開くやいなや葉にコブ（直径5ミリ前後）を作り（葉の表面には半球、裏面は円錐状）出すもの（イスノキハタマフシ）、葉の付け根に出来る数ミリの球形のもの（イスノキエダコタマフシ）、さらに小枝の先に大きなコブを作るものとがある。葉に数多く出来るものが、葉をゆがめてしまい、コブの脱色が目立って美観を損ね、樹勢を衰えさせるのは明らかである。

枝の途中につく小さな球状のコブは花芽に取り付いたものであろうか。枝先にできる大きなバルーンは、ナスビ形（イスノキオオナガタマフシ）と最も大きくなりやや扁平なもの（イスノキオオタマフシ）があり、最大では直径8センチにもなるそうだ。大門地区では5センチ位までのコブが見られる（皇居の東御苑に更



に大きいのがある、2009.4.2)

ムシコブは葉や芽先にアブラムシなどが卵を産み付け、その虫が育つ過程での刺激で、植物細胞が異常に生長し膨れたもので、コブの中に幼虫を見つけることもある。

虫こぶはイスノキ以外のあらゆる植物の、さまざまな部分にできるが、エゴノキに出来る房状のエゴノネコアシ(エゴノネコアシアブラムシによる)は、赤塚公園のあちこちで見られる。クリの木の新芽が赤い節くれになる(クリタマバチによるクリメコブズイフシ)のを各所で見かけるが、赤塚城址公園の梅林南端にあるクリの木にも付いている。木が非常に弱り枯れてしまうまでまとい付くようだ。

虫こぶにはタンニンが含まれるが、植物は本来菌類や虫からの防護組織として、木全体にタンニン(今話題のポリフェノール化合物の1つ)を含んでいるので、虫こぶが出来ると自己防衛機能が活発になり、こぶのところに集めるのではなからうか。

虫こぶのタンニンは古くから利用され、特にヌルデの葉の翼部に(ヌルデシロアブラムシによる)出来る大きなコブは、フシ(五倍子、付子)と呼ばれるタンニン剤として、薬用(咳・下痢止め、止血・鎮痛・消炎など)染料用(黒色染織、お歯黒、インクなど)そして工業用(防腐、皮のなめし、陶磁器の融剤など)と広く利用されるようである。

イスノキのコブからアブラムシが脱出する際に穴が出来るが、枯れて硬くなってから、穴の横から口で吹くとヒュウと音がするので、虫コブを「ヒヨンの実」と言うのが通説である。ヒヨノキと言う名もここから生まれたのではなからうか。「ヒヨナ」(こと)という言葉には奇妙なとか妙な(こと)という意味があるので、奇妙なコブが沢山出来る木であるところから、ヒヨナ木であることが発端で、ヒヨノキに変わったことも考えられる。イスノキは古くからアブラムシに魅入られて・・・としか言いようもないほどコブをまとい続け、アブラムシとの腐れ因を断ち切れないようで、お気の毒にと同情したくなる。



赤塚公園では最近イヌシデの枝先のムシコブや、シロダモ、エノキ、ケヤキその他の木に沢山の醜い黒斑や奇妙なイボなどの異常が、葉だけでなく幹などにも見受けられる。コブを作るのはアブラムシやタマバチだけでなく、ハエ(ヨモギエボシタマフシ)菌やダニ、センチュウなどによるコブ(ボケ、桜などバラ科植物の根コブ病やテングス病)も虫こぶの範疇のようだ。

コブを作るものは全て悪者ではなく、豆科植物の根に付くコブ(根瘤菌・棹菌の一種)は空気

中の窒素を宿主に供給する、非常に有益なものとして知られている。

コブではないが通称「絵描き虫」と呼ばれる潜葉虫が最近多発している。葉の中を小さな虫が動き回って、内部だけを食い荒らして白い線状の模様が外から見える。白線の終端にぼつんと黒点が見え、いま虫がここを食い進んでいることがうかがえる。これも植物の美観を損ねるとともに、植物を弱らせてしまいガーデナーを悩ませている。(猪鼻昭二)

**虫こぶのいろいろ**写真左上：クリの虫こぶ、左中：イヌシデの虫こぶ 左下：ハルニレの虫こぶ  
右上：エゴノキの虫こぶ、右中：エノキの虫こぶ、右下：ケヤキの虫こぶ



## いたばし水と緑の会 また1年をよろしく

いたばし水と緑の会 会長 鈴木 信子

待ち望んでいた春、私の散歩コースのひとつ、旧白子川の花筏の中で遊ぶ子ども達のにぎやかな声が聞こえていたと思っていたら、いつの間にか公園では薫風の中でボール遊びに興じる声が聞こえてくるようになりました。

「自然は神なり」と私は思っていますが、四季折々私たちの周りを包んでくれる自然の姿に畏敬の念を持ち、喜び、慰め、癒されて生きていく幸せを感じます。

私達のいたばし水と緑の会も結成13年目を迎えました。その年月にも自然は大きく変容しました。その間に、地味ではあっても地に足をつけた自然環境の保護活動に弛まぬ努力を続けて来られた会員の皆様、後押しして下さった多数の皆様にお礼を申し上げます。

活動拠点の一つである赤塚周辺の散歩コースは連休も家族連れの憩いの場所になりました。子ども達の未来のために板橋区の緑被率の減少が止まり、増進に転じることを心から願い、水と緑の会が大きく育つよう念じております。

## 板橋の森 今と未来

板橋の特徴はなんといっても武蔵野の崖線。崖の自然樹林は幅が狭くても立体的でボリュームがあるように見え、坂道を引き立たせる。北向きの急斜面が幸いして、開発されずに残された森も、建築技術が進歩したのか、需要があるからなのか、次々と破壊されマンション等が建つようになった。このままだと、板橋区の崖線樹林はなくなってしまう、という危機感から「身近な自然ネット」というグループができ、区内の樹林地の現状を見て歩いた。そして、身近な自然ネット・いたばし水と緑の会は、成増の樹林地（主に成増4丁目緑地）をフィールドに、残された森＝「次世代に引き継いでいく自然財産」の価値を継続して勉強することになった。

まず5月2日は、成増の3つの樹林地を見た。

成増1丁目向新田の森（成増1-35、川越街道そば）

成増四丁目第二緑地（成増4-24、白子川の支流コイド川の源流にあたる）

成増4丁目緑地（成増4-34、旧白子川に沿った急斜面の樹林地）

どの森にも歴史がある。私が知っているのはそのひとかけらだけ。

### （1）成増1丁目向新田の森（平成20年度整備、830m<sup>2</sup>）

マンション開発の際に寄贈された森。マンションが建つ前にあった大きな森は、川越街道の切

り通しのケヤキの並木と共にこの地のランドマークだった。この森とは数年前からお付き合いがあったが、ここではその経緯は省略する。

残された森「成増1丁目向新田の森」の整備にあたっては、地元住民と自然ネット・マンション建設業者・行政（みどりと公園課）が同じテーブルについて何度も話し合いを持った。私達の要望を入れて、フェンスに囲まれた閉鎖型の緑地となり、マンション建設地に生えていた貴重種を移植し、道路側の処理・よう壁・階段なども、可能な限り自然を残す配慮をしていただいた。



成増1丁目向新田の森の内部

さて、この日は「見守り会」の高木さんと一緒に樹林地内を観察。整備にあたり常緑樹・ササを伐採した新緑の明るい森には、たくさんの実生や若い木と移植した植物が、人に踏みつけられることもなく育っていた。移植したキンランは見あたらなかった(が、なくてもいいじゃないの、キンランだけが森の宝ではないのだから)。小さな森だが、地元に見守られて周囲にゴミもなく、こういう形で残されたことをしみじみとありがたいと思った。

マンション敷地内の西端斜面は、全面造成される計画だったが、川越街道側の半分は樹林を伐採しただけで地盤がそのまま残され(この部分の自然も残された)、半分は造成地でそこに植栽された。伐採だけで地盤がそのままのところは緑で被われた藪になり、そこからアカメガシワなどが伸び始めていたが、造成されたところはまだ土がむき出しのまま。時がたてば植物の種が野鳥や風に運ばれて来て芽生えると思うが、表土を残すことの大切さを実感した。

## (2) 成増4丁目第2緑地(平成20年度整備、802m<sup>2</sup>)

2006年、宅地開発の反対運動に私たちも賛同して署名を集めたが、今は森があったところに家が建ち並び、知らない土地に迷い込んだような違和感をもつ。行政の尽力により広い森の一部が残されて、成増4丁目第2緑地になり、板橋区内ではじめて特別緑地保全地区に指定された。指定されたということは、この場所が現状凍結的に保全されることを意味する。板橋区の公園緑地の概念の中に「自然」が位置づけられてうれしい。

ここには幹まわり3.1mのケヤキの巨木はじめ、ケヤキ、ムクノキ、クヌギ、エノキなど大きく枝を張り育った大木が多く、また人によって植えられた植物のほとんどない自然樹林地である。2006年6月、開発前に私たちが実施した調査では付近にタヌキのためフンがあり、イタチの目撃情報が



左：成増4丁目第2緑地、右：ボーイスカウトの森

数件あった。隣接するボーイスカウトの森や生産緑地などがつながった大きな緑のかたまりがあったからと思われる。イタチは今でも出没しているのだろうか、もう無理だろうなあと思う（釣巻さんによると、イタチの板橋区の記録は昭和44年大門が最後だとか）

さて公有地になったら下草・低木が刈られた。区役所にはケヤキのアブラムシの苦情も寄せられたらしい。最近が高木がまるで迷惑施設のように扱われるがなんとか共存してほしいと思う。

写真のように階段を挟んで右側がボーイスカウトの森（民有地）、左が区の緑地で緑がつながっている。公有地になると低木や下草はない。

### （3）成増4丁目緑地（平成2年開設、2500m<sup>2</sup>）

上の二つの森と比べても面積が倍以上もある大きな森。この緑地の大半は借地だったが買収して区有地になった。これで森がマンションになった、という事態は避けられ、まず一安心。なお隣の民間の樹林地も合わせると、3700m<sup>2</sup>にもなる。

私は、2000年にトラップによる昆虫調査を実施したときの強烈な印象が今でも忘れられない。この緑地でトラップから溢れるばかりの虫がかかった。動物の死骸を食べるオオヒラタシテムシの幼虫と成虫はうんざりするほどいたし、アオオサムシもいっぱいいて、区の公園のなかでは自然度が一番高い森だった。が、当ても林床には下草や落ち葉もないつるつるの地面が多く、森があまり大切にされていないように感じていた。ところが昨年度の区の昆虫調査ではアオオサムシがほとんど確認できなかったという。2000年の調査から10年近くたって、昆虫が住みやすそうな地面がさらに少なくなった感じがした。林床は今回（5月）も3月に撮影したときとほとんど同じで地面がむき出しである。すぐ近くにあった森もなくなった。



成増4丁目緑地(2007年3月撮影)(写真ではわかりにくい木道があり、その奥は民有地)

このように3地点を見ても、森が失われ、そこにいた生き物も姿を消し、そのなかで、かろうじて公有地になった森は住宅に囲まれて遠慮しながら存在している。

財政難の中で新たに確保された緑地は、区民が中に入って楽しむ利用は制限される。もう利用できる程の面積がないとも言える。

板橋区には広大な荒川河川敷があるが、まちなかは小規模の緑地が多い。急斜面の崖線樹林地の公園も多くは規模が小さく、利用を前提としているため整備や人が入るため地面が傷んでいる。枝の切り詰め（まとめ切り）に私達はショックを受けるが、苦情が多いのと枯れ枝の落下事故もこわいし、なにより維持経費が圧縮されているらしい。緑地を大切にするために私達の役割も期待されている。高齢化が進み、期待されている団塊の世代のボランティアも年をとる。また否応なく社会の活力は低下していく。

まちなかの自然を「大切にすると」とはどういうことか、どうしたらよいのか、フィールドワークの中で考えていきたいと思う。（身近な自然ネット・いたばし水と緑の会 坂本 郁子）

## 観察・活動記録(2009年3月～4月)

3月21日(土)

赤塚トンボ池に油膜あり(プランクトンと思われる)水質:気温15、水温12、COD7。梅まつりの時にあったカエルの卵塊は1カ所のみ。一部がごく小さなオタマジャクシになっていた。カエルも見あたらず、今年はカエルも少ない。トンボ池に粗大ゴミが投げ込まれていた。高さ150cmもある柵の中に入って荒らした形跡があった。

バッタ広場ではササ刈、若木切り、セイタカアワダチソウのロゼットの抜き取りに専念する。越冬中のクビキリ、キタテハ。広場に沿った斜面林に除草剤を散布した跡。子どもが拾ったカブトムシ死骸(写真)を見せてくれた。大きくて人気の外国産のカブトムシ(コーカサスカブトムシ)らしい。生態系に与える影響が心配されている話題の外来種。私達も実物を見たのははじめて。その有名なカブトムシが赤塚公園にも迫ってきたとは・・・



3月28日(土) バッタ広場

気温低い。トンボ池にカエルもオタマジャクシ見あたらず。

バッタ広場のササの掘り起こし、刈り取り。拡大しつつあるオギの新芽除去、前の週に抜き取ったのにセイタカアワダチソウのロゼットが目立つ。バッタ広場は木もなくなって地上部はさっぱりして何も無い(土がむき出しのところも)。バッタ広場は今年で10年目になり、枯れ葉の下に腐った落ち葉がたまったふかふか状態で、セイタカアワダチソウのロゼットもするりと抜ける。越冬中の虫いろいろ(アオオサムシ(2匹)、コアオハナムグリ、クロコガネ、オオゴミムシ、チャバネカメムシ)。刈った草や枝を積んだ場所には甲虫の幼虫。

4月18日(土) 浄蓮寺下ミニトンボ池調査

手作りの生け垣が刈られスカスカになっていた。「見通しが悪いのは困る」という話だったので公園管理所で切ったようだ。サンクチュアリの環境はあきらめなければならない。この日のザリガニの捕獲数は大3、中8、小(ミニも含む)25。オオシオカラトンボヤゴが46匹(写真右)、グロスジギンヤンマヤゴが2匹、ヨコエビ、ミズムシ多数、ガガンボの幼虫1、とトンボの生息環境が戻った。真田さんの作戦大成功。ヒキガエルの卵も5塊、ジムグリ。



4月27日(土) 雨により中止

# 活動のお知らせ

運営委員会は第4土曜日の作業・観察会の後に赤塚ため池公園そばのラーメン「しらかば」で行い、報告や活動内容などを相談します。どなたでもお気軽にご参加ください。午前中の作業の状況で時間が多少ずれること、雨天で作業が中止の場合は取りやめることがあります。わからないときは、坂本(090-4618-1295)に御連絡下さい。

5月運営委員会： 5月23日(土) 12:30~13:30

6月運営委員会： 6月27日(土) 12:30~13:30

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：7月15日(水) 18:30~ 場所：エコポリスセンター

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは事務局瀬田まで(3969-7124)

会では赤塚城址周辺で、私たちが作ったピオトープを中心に自然の変化を観察したり、ゴミ拾いや、ピオトープの環境整備を行っています。観察会は原則として雨天も実施します。

5月23日(土) 10:00~12:00

湧水水路の調査と水路の泥さらい、草刈り

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば) 持ってくるもの：長靴、軍手

6月20日(土) 10:00~12:00

バッタ広場ササ刈等とバッタ広場生き物観察

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば)

6月27日(土) 10:00~12:00

バッタ広場ササ刈等とバッタ広場生き物観察

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば)

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)

いたばし水と緑の会の活動はすべて会員の会費によってまかなわれています。主な用途は、会報郵送料、印刷費、ピオトープ池維持管理のための資材費、コピー代などです。